

北アフリカの風景

JICA の仕事を通じて、北アフリカで長く過ごしました。モロッコに 2 度駐在して合計 6 年、チュニジアには 1 度 3 年間生活しました。親日的な人々が多く、美しい自然を持つ国です。アルバムから、両国の代表的な風景の写真を探してみました。両国の共通点は地理と風景でしょう。両国とも地中海に面して、その海が美しく、太陽光線で海の青が七色に変化するさまは、見とれてしまいます。また、国土を東西にアトラス山脈が走り、その南はオアシスを経てサハラ砂漠に続きます。大変自然の変化に富んでいます。もう一つの共通点は歴史です。紀元前 2 世紀から紀元後 3 世紀頃の間、ローマ帝国に属し、7 世紀半ば以降、イスラム国になり、さらに 20 世紀の前半、フランスの植民地になりました。現在、両国ともイスラム国であり、また、外国語としてはフランス語が最も通用します。小麦粉を小粒に練ってそれを蒸して作るクスクスは、両国の人気メニューです。

両国の相違点は、チュニジアは、16 世紀から 20 世紀の初めまで、オスマン・トルコの領土になったことです。チュニジアの東西の隣国、リビアとアルジェリアとの国境線は、オスマン・トルコ時代に行政区分として敷かれました。チュニジア人は、よくコーヒーを飲みますが、これはトルコ文化です。モロッコは、アツツアイとよぶミントティ（甘いハッカ茶）をしょっちゅう飲みます。モロッコ茶の習慣は、18 世紀に英国王室からモロッコ王室へ、当時高級品であった茶が贈答品としてもたらされたことが始まりと伝えられています。モロッコは、7 世紀のイスラム王朝成立以来 19 世紀の半ばまで、外国の侵略を防ぎ、現在の国土を形成してきました。モロッコ部族の団結心と騎馬隊は大変強かったようで、写真のように、現在も騎馬兵の祭り（ファンタジア）が国内あちこちでしばしば行われて、大変盛り上がります。モロッコは、フランスからの独立後、王政（アラウイット王朝）が復帰し現在に至っています。（次ページへ続く）



チュニジア・カップボーン岬の温泉



モロッコ騎馬隊の祭り・ファンタジア



モロッコ中部オアシス

チュニジアは、昨年1月、国民の民主化運動が盛り上がり、独裁的なベンアリ大統領が倒され、アラブの春の先駆けになりましたが、モロッコは、現在のところ平穏です。モロッコの友人たちの話を総合すると、現在の国王モハメッド6世は、貧困地域を巡回しながら国の開発に取り組み、国王の政治的権限を議会に移す民主化方針を率先実行して、国民の支持を得ているとのこと。又、王妃が民間人の女性であること、日本の皇室をモロッコ王室の将来のモデルにしていることなども、国王の人気の理由のようです。イスラム世界の多様性を実感します。

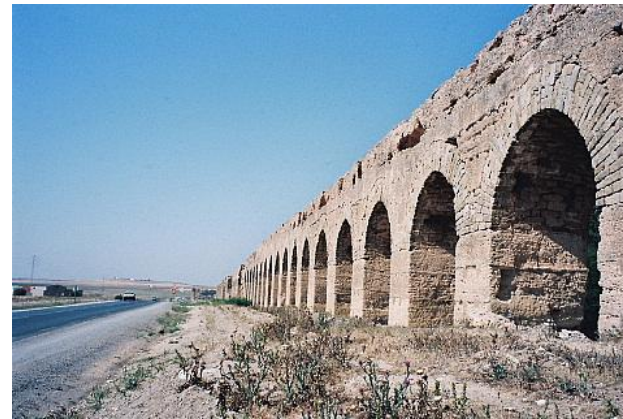
アルバム：地中海とローマ遺跡など



チュニジア・カップボーン岬



ローマの大浴場跡(チュニジア・カルタゴ)



チュニス郊外、ローマの水道橋



ローマ遺跡(チュニジア・ドゥガ)



ラバト河口のポルトガル砦跡から大西洋



ローマ遺跡(モロッコ・ボリビュリス)

アルバム：モロッコの首都ラバトの風景

三つの顔：旧市街（カスバ、メディナ）、フランス時代（大建築、鉄道等）、独立後の新市街（若い人）



カスバ・ドゥ・ウダイヤ



旧市街（メディナ）のにぎわい



ラバトの城壁（旧と新市街の境）



ラバト駅（フランス時代）



ラバトの中心、モハメド5世通り



ラバト新市街を散歩する若い世代

アルバム：モロッコ南部地域のオアシス



オアシスの集落



オアシス地域の村



山岳地帯の村



南部乾燥地帯の村



カスバ（400年の歴史）



冬のアトラス山中（JICA 調査団）